

第1回中間報告

(2014年9月21日～12月21日)

国際ロータリー第2710地区
2014-2015年度グローバル補助金奨学生
宗盛千枝

1. 報告書提出日：2014年12月22日 第1回報告
2. 基本情報
 - ・氏名：宗盛千枝
 - ・派遣ホストクラブ及びカウンセラー：呉ロータリークラブ、神垣和典様
 - ・受入ホストクラブ及びカウンセラー：The Rotary Club of Pocklington & Market Weighton, Mr. David Hirst
 - ・現住所：HHI/B/115 (Halifax College. Hickleton Court. Block B. Room 115.)
University of York, York, YO10 5DD, United Kingdom
 - ・連絡先電話番号：+44-7796-08246
 - ・E-mail：thousands.of.branches@gmail.com
 - ・教育機関、専攻分野：The University of York, Post-war Recovery Studies

ヨークとヨーク大学について

2014年9月下旬よりイギリスはヨークにおいて国際ロータリー第2710地区グローバル補助金奨学生としての生活が始まりました。ヨークはイングランド北部のノース・ヨークシャー州に位置し、面積と人口はそれぞれ呉市の7割強と8割強に匹敵する都市です。紀元71年にローマ人によって建設されたこの都市は現在でも古い城壁を残しており、シャンブルズ通りに代表される情緒ただよふ街並みも相まって、多くの観光客でにぎわう街です。また、紅茶とチョコレートが美味しいことで知られ、勉学の息抜きに私もよく舌鼓を打っています。



(ヨークミンスター前にてカウンセラーのDavidさん)

ヨーク大学は1963年に設立された総合大学です。市の中心部から約2kmに位置するキャンパスで、学部生と院生を合わせて1万5千人以上が学んでいます。私が所属するのは政治学科の戦後再建・発展ユニット内にある戦後復興学コースです。

学業面での成果

戦後復興学コースでの授業は10月上旬に始まりました。カリキュラム構成は、4週間にわたる一連の授業で1モジュールが構成され、1年間で4モジュールを学ぶというものです。モジュールごとに異なるテーマが設定され、時には外部の組織からスピーカーを招いてそのテーマについて学びます。例えばモジュール1では「紛争と紛争への反応・対応」をテーマに、紛争分析や平和に関する基礎的な項目をヨーク大学の教授から学び、アイルランドや南アフリカで起きた紛争のケーススタディについては現地で活動するNGOの職員からレクチャーを受け、さらに国際人道法に関する授業では他大学の教授を招へいして専門的な講義を受けました。これまでの授業のなかで特に学びが多かったのは、現場経験が豊富な講師陣から直接話を聞くことができる点です。NGOの職員やそうした場での就業経験が長い教授の講義は、座学で学んだ内容が現場でどのように役に立っているのかを確かめるチャンスである一方で、理論では説明不可能な「勘」や「人間模様・人間関係」、「コミュニケーション能力」がプロジェクトの成否に大きな影響力を持つことを学ぶ場でもありました。そうした「現場で培われる力」とも言い換えられるスキルは大学院で身に着けることは困難ですが、理論の限界性と非完全性を知っておくことはできます。



(ボスニアはモスタルで訪れたモスタル橋)

大学院で学んだ内容だけで現場で起きることをすべてを説明できるわけではないと心得ておくことは、現場で机上の空論を振りかざす“専門家”になってしまうことを避けるために必要なことだと感じます。2ターム目が終了した11月下旬からは、終戦から20年を経た現在の状況を調査することを目的に、2週間にわたってボスニア・ヘルツェゴビナでのフィールドトリップを行いました。首都のサラエボと北部

のバニャルカ、南部のモスタルの3都市を巡り、それぞれの地域で活動するNGOや国連関連機関、大学の関係者から話を聞きました。フィールドトリップ中に得た収穫のなかで最も大きなものは、政治家の意識/政策と市民の意識/生活の乖離です。ボスニア・ヘルツェゴビナを構成する主要3民族はボスニャク人、クロアチア人、セルビア人と異なる民族名がつけられていますが、現地の人々の話によれば、彼ら自身でさえ、顔を見ただけでは誰がどの民族に属するのか判断するのは困難であるとのこと。なぜなら話す言語がほとんど同じであるだけでなく、戦前から民族を超えた結婚が当然のように行われてきた結果、市民の生活レベルでは民族の違いを意識することがないからとの話を聞きました。一方で、現在の学校教育では「Two schools under one roof(一つの屋根の下に二つの学校)」と呼ばれる状況が広く浸透しています。例えばボスニャク人が多数派を構成するサラエボでは、ボスニャク人の生徒は午前中に授業を受け正午に帰宅します。彼らが帰宅するころ、教室のもう一つの入り口からはクロアチア人の生徒が午後からの授業を受けるために登校してきます。このように学校教育の場面では、民族を分断するような政策が未だに根強く残っている現状があります。このような政策と市民の意識の乖離の原因として、汚職の存在が考えられます。市民が選挙権を行使したとしても汚職によって政権交代が進まない、または市民自身がそのような汚職を懸念して投票に積極的ではないため、結果として市民の意向が政策に反映されないからです。汚職はボスニア・ヘルツェゴビナに限らず特に紛争後の地域では広く見られる現象であり、これに対処することなくして民主的な国の再建はかないません。戦後の復興期に当該国が直面する課題の一つである汚職について学ぶことができたフィールドとトリップでした。

受入地区でのロータリーとの関わり、奉仕活動、カウンセラーとの交流

カウンセラーの David Hirst 様は渡航前から頻繁に連絡をとってくださり、ヨークに到着後はすぐにお会いする機会を作ってくださいました。その際にはヨークの城壁内の歴史を案内していただきながら、生活面で困っていることはないかと親身に相談にのっていただき、慣れない生活が始まろうとしている時期でしたので非常に心強く感じました。

その後10月3日にはThe Rotary Club of Pocklington & Market Weightonの設立を祝うディナーに呼んでいただき、他のロータリアンの方に初めてお会いしました。どの方も親切にゆっくりと話しかけてくださり、正式なディナーの場が不慣れな私も落ち着いて過ごすことができました。ロータリアンの方々の口ぶりから、私の前に同じく奨学生としてヨークで過ごした日本人学生がみなさん生き生きと過ごされていたことが推察され、そのような生活ができるような手厚いサポートをしていらっしゃる方たちのもとに来られたことを大変嬉しく思いました。

10月18日にはヨークから車で一時間ほど北にあるScarboroughにて開催されたThe Rotary District Conference(地区大会)に、前夜のパーティーから参加させていただきました。パーティーでは3日にお会いしたロータリアンのみなさんとディナーとダンスを共にさせていただきました。ビートルズ以前の世代の方々が、青春時代に流行した音楽に合わせて踊る姿はとても印象的でした。翌日の大会当日は、ステージにて地区内のクラブが活動報告を行ったり、大広間で慈



(Scarboroughでの地区大会でのブースの様子)

善事業のブースを出展したりしているのを見学しました。ロータリーピースフェローとして現場での活動報告を行った方二名のうち一名は英語が母語ではない方で、その方のよく構成が練られたスピーチと自信をもった話しぶりは大変刺激になりました。

私が大学院で勉強していることについて受け入れロータリークラブのみなさんの前でプレゼンテーションを行う機会は、来年の3月ごろの予定です。

直面した課題、問題点等

英語、特に議論で積極的に発言できるだけの英語力が十分ではないと感じています。最も力不足を感じるのは、ネイティブスピーカー同士が早口で議論を交わしているときです。国際会議をシミュレーションする授業中の苦い経験として、内容を正確に理解できないため自分の意見を言うことができないだけでなく、ファシリテーターとしての役割を担っていたため会議の進行が遅々として進まないということがありました。ネイティブ同士が早口で意見を交わしているなかで彼らの見解を踏まえて自分の意見を言うことは、大学院在学中だけでなく、将来にもわたって避けては通れない道です。これを可能にするためにできることは、事前にその内容についての知識をできるだけ多く予習しておく、ネイティブのスピードの速い英語に慣れるために、普段から友人たちにお願ひして早い英語で話してもらい、またわからないことに物怖じせず正直に質問するようにする。などがあると思います。また、彼らの話す内容が100%、理論立っていると過信しないようにするというのも大事だと思っています。こちらに来て驚いたことのひとつに、学生の発言内容が必ずしもその前の発言者の発言内容を踏まえたものもしくは質問者の意図を汲んだものというわけではないことがあります。彼らが自分の考えを積極的に述べることを目的に、前後の脈絡とは関係なしに発言することは彼らにあたりまえです。このような傾向がよいか悪いか判断するのではなく、こちらの環境に合わせて「まずは自分の意見を提示する」という姿勢を身に着けたいと思っています。

今後の課題、目標

来年2月末にモジュール4が終了したあとは、戦後復興または関連分野で活動する海外の機関でのワークプレイスメントが待ち受けています。6~8週間にわたって現場に身を置き、その機関の補助的な業務を行いながら修士論文に必要なリサーチを行うことが求められます。私はジェンダーの授業で取り扱った「男性に対する性暴力」というトピックについて修士論文を書きたいと考えており、現時点では世界で最も多くレイプ被害が報告されているコンゴ民主共和国でワークプレイスメントを受け入れてくれる機関を探しています。ワークプレイスメントまでに、修士論文の骨格とリサーチクエスチョンを明確化することが第一の目標です。

第二の目標として、このトピックについて将来どのような働き方ができるのかについて、少しでもイメージできるようになることがあります。女性や女兒に対する性暴力は男性に対するそれに比べてすでに多くの関心が寄せられています。男性に対する性暴力に関心が払われていないということは問題として認識されていないということであり、この問題に関する仕事もまだ広く知られていない、または確立されていないということです。解決されるべき問題があるのにそれを担う人材がないということでもあります。そのような分野でどのような働き方ができるのか、ワークプレイスメントを通して現場で働く人に話を聞き、将来の仕事として少しでも具体的にイメージできるようになりたいと思っています。